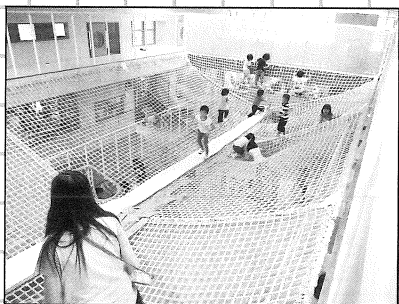


ゆうゆうのもり幼保園 神奈川県横浜市

シリーズ
子どもが
育つ場所を
訪ねて



日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

第8回は神奈川県横浜市にある、ゆうゆうのもり幼保園。幼稚園と保育園、両方の機能を併せ持つ、新しい保育の場を訪れました。



保育園・幼稚園の枠を超えた新しい施設、それが幼保園。ゆうゆうのもり幼保園が開園したのは平成十七年、その後、平成十九年に「認定こども園」となり、現在に至っている。開園当初より大切にしていることは「子どもが子どもらしく育つこと」「保護者の就労の有無や子どもが過ごす時間の長短に関係なく、どの子にとっても居心地のいい場所を目指すこと」、そして「常に『子どもにとって』という視点を見失わないこと」。ここであえて「見失わない」と言っているところにこだわりが見える。

「子どもにとって」という視点を中心において新しい保育の在り方を構築している「ゆうゆうのもり」。その思いはどのように実現しているのだろうか。子どもたちの姿を追いながら確かめてみた。

◆上と下をつなぐものから生まれる動き

園の設計を担当したのは環境デザイン研究所（会長 仙田満）。渡辺英則園長を中心に、現場の声や夢を盛り込みながら創り上げた園環境は実に魅力的だ。

「子どもの居場所には縦の動線はいっぱいあっていい」とは仙田氏の言葉。上と下をダイナミックにつなぐ構造が随所に見られる。二階に上がると、屋根裏部屋のような部屋があった。入り込みたくなる空間があり、炊飯器や布団を持ち込み、友達とゆっくり時間を過ごしている子どもたちがいる。空間や時間が子どもたちの思いに任されていることを実感する。



園庭の砂場の上にもネットがあり、一部は小さなハンモックのようになっている。そこに座り、揺れながら団子作りをする子がいた。そのそばで「きなこ砂」で泥団子作り。小さな箱を囲んで子どもたちがじっくり団子を作っている。



▲奥に見えるのが「おおかいだん」

保育室は二階にある。部屋へ戻る時、「どっちから帰る？」と相談している声が聞こえた。中を通って帰ることに相談はまとまり、大きな階段を上っていく。私が「すてきな階段ね」と話しかけると、「おおかいだんって言うんだよ」と誇らしげに教えてくれた。縦の動線がふんだんにある園内で伸びやかに過ごす子どもたち。場を移動する道程もまたワクワクする時間なのだろう。心に残ったのは「おおかいだん」という名前。特別の名前が付けられた場は、うれしい場所として存在感を発揮している。

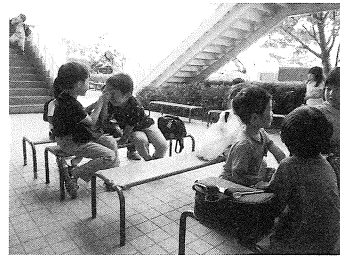


◆光の時間から風の時間へ移るとき

いろいろな動き方をする人たちがいて

ゆうゆうのもりでは、時間にも名前が付いている。光の時間（通常の保育時間）、風の時間（預かりの時間・地域の時間）という名前だ。「預かり保育とは呼ばず、子ども特有の生活時間帯に合った名称で呼ぼう」という考えから生まれた名前だ。「子どもにとって」という視点がここに確かに流れている。

時間の移り変わりは、スパッと切るような形ではなく、重なりながらゆっくり移っていく形だった。一時半ごろ、各クラスでの集まりを終え、子どもたちはそれぞれに分かれていた。預かりの子たちは年齢ごとに集まり、先生の話を聞く。先生は最後に、「○○君、四時です」「△△ちゃん、



四時半です」と知らせていた。子どもたちは「はい！」と返事し、それぞれに遊びだした。

一方、帰る子どもたちは乗車する園バスごとに2グループに分かれている。第一便の子たちは、玄関前のベンチに座り、バスを待っている。遊びスペースからは遠く離れたこの場所、たっぷり遊んだ心地よさを体に残しながら、友達とおしゃべりを楽しんでいた。

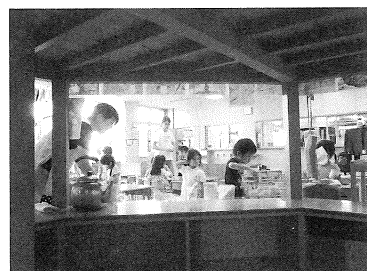
第二便のバスの人たちは、しばらく園庭で遊ぶ。広いテラスに自分のカバンを置き、預かりの子たちと一緒に遊びだした。大きなヤカンに水を入れ園庭にまき、泥の池を作りだしたり、斜面にホースで水を流し、滑り降りたり、ダイナミックな遊びが次々に始まった。砂場では水路作り。ペットボトルに水を入れて運び、二人一緒に流したり、水の行方をみ込んで確かめたりして遊んでいた。



二時半、第二便のバスの時刻。帰る子たちは片付けを終え身支度を整え、待合場所へと向かう。階段を上り、二階テラスの長い外廊下を通り、玄関の待合場所へ行く。その道程の中で、遊びの時間から帰る時間へと自分自身で切り替えているように思えた。



▲「本よんで」の声にこたえて……



▲食べたい時がおやつタイム

◆風の時間　　～家庭的雰囲気大切に～

三歳児には「眠りたくなかった人は寝ようね」という呼びかけがあった。寝る子たちは二歳児保育室へ。すでに二歳児がスヤスヤと眠っている。風に揺れるカーテン、天井でゆっくり回る大きな扇風機。すべてが穏やかだ。先生もゴロンと横になる。少しキヤツキヤツとなりそうになると、「みんな、ゴロンしている時はシーだよ」と優しく話していた。

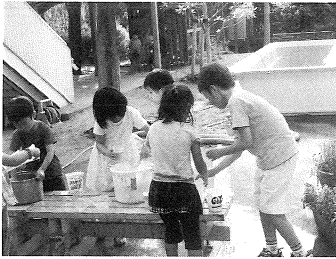
おやつはフリータイム制。自分が食べたい時にラ

ンチルームに行く。かごの中に名前のカードがあり、自分の名前カードを出しておやつをもらおうというやり方だ。子どもたちは自分のペースで思い思いに食べに来ていた。おやつ担当の先生は市から派遣されている人だという。お母さんのような温かさのある人だった。

昼寝もおやつも子どもの思いやペースに沿って。家庭の時間がしつかり意識されているのを感じる。

◆風の時間　　～園内に地域を持ち込む～

小学生ボランティアA君（二年生）登場。風の時間は地域の時間、子ども同士が家を行き来したり地域で遊んだりする時間だ。それを園内に持ち込みたいと考えて始めた小学生ボランティア。夏休みには、さらに在園の保護者が子どもを連れてボランティア



に来ることもある。それも大歓迎という話だった。「A君こんにちは」といろいろな先生に声を掛けられ、久しぶりの園内を歩き回っていたA君。しばらくして色水遊びの仲間に加わり遊びだした。気負うこともなく自然体のままで。これが風の時間の色合いなのかもしれないと思った。

◆光と風、それぞれの時間について考える

ゆうゆうのもりの風の時間、それは、預かりの時間という意味だけにとどまらない。光の時間を楽しんだ子どもたちが、自分の時間へと入っていく時間である。自分の時間を過ごす場所は、それぞれに違う。自分の家で、近くの公園で、そしてゆうゆうのもりの中で、子どもたちはそれぞれの「風の時間」を過ごしている。広がりのあるそれぞれの時間を過ごした子どもたちは、明日になればまた「光の時間」に集まり、友達と一緒に遊ぶ中で多くの体験をしていくのだろう。

「子どもにとって」という視点は、子どもたちが過

ごす遊び空間づくりや時間づくり、名称の付け方、生活や遊びの在り方の中にしっかり反映されていた。

最後に渡辺先生から話を聞いた。「保育園卒と幼稚園卒のバランスが大切。ゆうゆうのもりでは幼稚園卒がしっかり維持されている。どちらの卒ともちょうどよくいるときに、幼稚園としての意味が出てくる」という話はとても興味深い。バランスの問題について、しっかり考えてみたいと思った。

また、今後していききたいことは？ という質問には「保育者が育つことを真剣にやらないといけないと思う。中堅の人たちの居場所をつくりたい」という答えが返ってきた。さままざまな場で、子どもの姿や保育の在り方について発信している渡辺先生らしい言葉だと思った。

新しい保育の構築に果敢に挑み、常に試行錯誤を重ねているゆうゆうの

	保育園	幼稚園
0歳児	6	0
1歳児	10	0
2歳児	11	0
3歳児	11	50
4歳児	11	50
5歳児	11	50

▲現行の定員（3～5歳児では保育園児、幼稚園児が同じクラスに在籍）



もり。「子どもにとって」という視点を中心に置き、これからも歩みを進めていってほしいと願っている。

訪問者／川辺・宮里

文／宮里暁美（お茶の水女子大学附属幼稚園）

*夏号（第二二巻第三号）に、渡辺英則先生の講演記録が掲載されています。併せてお読みください。

— 訪問メモ —

訪問時期：2012年6月

訪問場所：認定こども園

ゆうゆうのもり幼保園

〔住所〕神奈川県横浜市都筑区早渕 2-3-77

〔電話〕保育園：045-590-0767

幼稚園：045-590-0765

[http:// www.youyounomori.ed.jp/](http://www.youyounomori.ed.jp/)